

【富山税務署長賞】

「暮らしを彩る見えない手」

富山県立富山商業高等学校二年 西川 結唯

汗水たらして働いたことが報われる瞬間がある。「給料日」である。世の中の社会人たちは、その日のために日々働いているのだろうが、例外なく私の父もそうだった。父はその日になると、少しだけ羽振りが良くなり、欲しかったものや、我慢していたものを買ってくれた。そんな訳だから、私たち姉妹は幼い頃から給料日が待ち遠しく、「給料日はまだなの?」と意味も分からぬのに口にしたこともあったそうだ。

だが、ある時から父は給与明細を渋い顔で見つめるようになった。どうやら原因は「所得税」「住民税」「社会保険料」らしい。名前は聞いたことがあるが、何のためにあるのか知らなかつた。税金の一種で、きっと何かいいことに使われているのだろう。そう思いつつも、せっかく生活に彩りを与えてくれるはずの部分が削られてしまうのは、正直もどかしい。父だけでなく、テレビやSNSでも給与から引かれる税金に嘆くサラリーマンの声をよく見かける。そこまで多く取られているのなら、税金は十分集まっているのでは?不満の声が多いなら、もっと減らしてもいいのでは?これが以前の私の本音だった。

けれど、税について調べていくうちに、私の考えは少しずつ変わっていった。年収別の税金一覧表を見ると、年収が増えていく度に手取り率が下がっていることが分かる。その原因のひとつが「所得税」だ。例えば年収一〇〇〇万円の人は、所得税や住民税、社会保険料を引かれて、手取りは約七三一万円。なんと二六九万円も税金で引かれている。私が社会人になつたら、こうやって税金を大量に払っていくのかと考えると、正直、虚しい気分にもなつた。調べれば調べるほど、税金への悪いイメージが膨らんでいった。

しかし、さらに調べていくうちに、私の考えは大きく変わっていった。私たちの身の周には、税金で支えられているものが数えきれないほどある。学校の教科書や病院、道路の整備など、日常生活を送るうえでなくてはならないものばかりだ。

中でも私が強く心を動かされたのは、災害時における支援費用のことだった。令和六年に発生した能登半島地震では、家を失った多くの人が避難所での生活を余儀なくされ、仮設住宅やインフラの復旧、医療や食糧の支援などが急ピッチで進められた。そして、こうした対応の裏には、私たちが納めている税金の力があった。ニュースで「全国各地で支援が集まっている」と報じられていたが、募金や物資だけでなく、税金という形でも誰かを支える仕組みがあるのだと知った。

これまで私は、税金を「奪われるもの」と感じていた。けれど今は、「未来の自分や、誰かの生活を支える大切なものの」と考えられるようになった。そう思うと、将来納める税金にも温かい気持ちで向き合えそうだ。